



クズ

クズは秋の七草の一つで、その茎(ツル)は長く伸び、10メートル以上にもなります。

春の七草が、厳しい冬を乗り越えるために「食べる七草」であるのに対し、秋の七草は「鑑賞する七草」です。典型的な秋の植物というよりも、ひっそりと秋の到来を知らせてくれる植物であるようです。

目 次

巻頭言

「関わる力で、教育課題の改善を」

小田原市教育研究所 所長 ……………2

1 小さなころみ

「授業を見直す視点に～児童生徒による授業評価(自己評価)を生かした授業改善～」

授業評価を活用した授業改善に関する研究員 ……………3

2 学びの架け橋

①「小・中学校の系統性を考えた体育学習～ボール運動・球技の領域を中心にして～」

保健体育 プロジェクト研修員 ……………4

②「児童生徒の心が動く道徳の時間を目指して」

道徳 プロジェクト研修員 ……………5

3 ある教室から

「夢中になって運動に取り組む体育学習」

教育指導課指導主事 ……………6

4 研究所だより①②

教育指導課指導主事 ……………7

8



関わる力で、教育課題の改善を

小田原市教育研究所所長

2011 年は、東日本大震災によって、日本にとって大きな試練の年となりました。宮城、岩手、福島を中心にその復興に向けての努力が今も続けられています。

その中でよく報道されているのが、全国から寄せられている支援の様子と復興に向けて励ましあい、協力しあいながら立ち上がろうとする地元の様子です。困難な状況におかれたときほど、周囲からの働きかけが励みとなり、お互いの密接な関わり合いが必要となります。

教育においても、直面している諸課題に対し、学校・保護者・地域が関わり合い、積極的に働きかけ、改善していこうとする姿勢が重要なことと思われます。

小田原市では今年度から全部の中学校区に学校支援地域本部が設置され、事業の推進が図られていますが、この組織が有効に機能するかどうかは、今後のお互いの働きかけや関わり合いにかかっています。

また、平成 23 年度は、小学校は新指導要領の本格実施、中学校は移行期の 2 年目となり、新しい教育課程での実践が各学校で展開されてきています。そして、学力向上や児童・生徒指導上の教育課題などに継続して取り組まれていることと思います。

なお、「学力向上」につきましては、小田原市でも今年度から「学力向上推進委員会」を立ち上げて「おだわらっ子学力向上推進計画」を作成しているところです。

このように、新指導要領により新たな教育内容の指針が提示されている中で、各学校は、今までの教育活動や教育内容を再点検し、教育目標の実現のための方策について、教職員・保護者・地域が共通理解し、互いが密接に関わりあって課題の改善を進めていく必要

があります。

そして、教師間では、子どもたちが抱えている現状の課題に対し、一人で行き詰まるのではなく、お互いに進んで情報を出し合って、共通の課題として取り組むことが大切です。みんなで知恵を出し合うことによって、新たな展望が見えてきたり、改善策が生まれてきたりするものと考えます。女子サッカーの「なでしこジャパン」も、体格的な不利を乗り越え、組織的な力を発揮して、ワールドカップ優勝という結果をもたらしました。

さらに、教師間で授業を見合い、お互いに学び合うという関わりを持つことは、指導力の向上とともに授業において子ども同士の学び合いを育てることにもつながるものと考えます。

また、教育課題の改善のためには新しい方策に積極的に取り組む姿勢が大切だと思います。変化する社会環境、家庭環境に対応して課題を改善していくためには、教育もまた新しい対応が必要です。教育講演会で講演された藤原和博氏は、著書「教師を信じろ」の中で、「トライ＆エラーで検証しながら理想型を模索していく修正主義が大切」と述べています。現状より少しでもよい方向に向かうと考えられたなら、そのつど改善を加えながら新しい方策を立てて、勇気を持って一歩踏み出していくことが望まれます。

教育研究所も、教育課題を改善していくための研究・研修の場や参考となる情報をなるべく多く提供できるように、今後も努めていきたいと思っています。





授業を見直す視点に～児童生徒による授業評価（自己評価）を生かした授業改善～

授業評価を活用した授業改善に関する研究員



1 はじめに

小田原市教育委員会では、昨年度より学校評価の一環として、「児童生徒による授業評価」を取り入れ、授業評価の内容や具体的な評価項目を示した。授業の姿を総合的に評価する方法は、各校に任されており、評価の方法も多岐にわたる。本研究では、今まで行われてきた授業評価のうち、特に児童生徒による授業評価を中心に実践を行い考察してきた。

2 昨年度の取り組みと実践

【中学校 第2学年数学科の授業】

授業で理解したと思ったことが、確実に定着していない生徒が多く、復習の量を増やすことが課題となっている。そこで、学習評価カードを利用し、授業内容の確認を図って自らの学習活動の振り返りを行った。評価の項目を明記し、授業と評価カードを連動させたので、生徒は迷わず、自己評価することができていた。1時間1時間丁寧に振り返ることが、学習意欲にもつながった。また、自己評価することで、わからない点が明確になるため、家庭学習に取り組む生徒も多くみられた。しかし、この評価は自己評価であることから、教師の評価とどう連動させていくのが課題である。

【小学校 第5学年算数科の授業】

「平行四辺形と三角形」では、二人組で、板書された考え方を説明し合う活動を積極的に取り入れた。指導者としては全員が説明できたと感じたが、授業評価でマイナスの自己評価をしている児童が4名いた。その原因は、適切な説明について明確な基準がないことだと考えた。そこで、その考え方において何が大切なのかキーワードを検討することの重要性を感じ、「説明のポイント」を全体で話

し合って決める活動を取り入れることにした。その結果、キーワードについて話し合うことに数学的な考え方の深まりがあったり、授業評価で自己評価の数値が高くなったりするなど、この授業改善策が有効なものとなった。

【小学校 第2学年生活科の授業】

授業評価カードを使ったことで、次の授業の際に、誰に言葉かけをしたり、注意を払ったりする必要があるかを考えながら授業を行うことができた。また、誰がどんな関心や疑問を持っているのかについても把握することができ、授業の計画を見直すのに役立った。「授業評価カードの書き方がよく分からなかった」という声もあったので、今後は、子どもたちの実態に応じて、評価カードの形や内容を変えていくことも必要だと考える。

3 今後の取り組み

児童生徒による授業評価を取り入れ、改善の必要な点やその原因を明らかにして授業改善に取り組んでいくことは授業を見直す大切な視点の一つである。今後も研究員による授業実践を行い、授業評価を活用した授業改善に関する研究を充実させていく予定である。



小・中学校の系統性を考えた体育学習 ～ボール運動・球技の領域を中心にして～

プロジェクト研修員(保健体育)

はじめに

今回の学習指導要領の改訂によって、「小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化を図る」と明記され、発達の段階のまとまりを踏まえて指導することが必要とされた。そこで今回、小中が一緒に研究を深められるこのチャンスに系統性をふまえて指導内容を明確にすることを研究テーマの中心に据えることとした。そして、指導内容の確実な定着を図ることができるよう、運動の取り上げ方が一層弾力化されたことも生かして、研究の中心をボール運動・球技の「ベースボール型」「ゴール型」に絞って行うことにした。

研究の内容

昨年度は、一年目という事もあり、小中それぞれ異なった校種の授業も参観して、実態を知ることが第一の目標とした。中学校における球技の授業実践としてアルティメットの授業を参観した。小学校と中学校の授業展開や指導法の違いについての確認の場となった。続いて小学校においてボール運動のティーボールの公開授業を行った。ベースボール型のスポーツは投・打・走など複雑な技能を身につけないといけないスポーツでもあるため、今回のようにティーボールを取り入れたり、子どもたちが楽しんでもできるようルールを改善したりしていくことが重要である。また、技能のポイントも十分に抑えられた授業であり、小学校から中学校へスムーズな移行が出来ると推測された。

動は、従来のサッカーやソフトボールといった種目から、ゴール型、ベースボール型といった型による学習になり、柔軟に学習内容を取り扱うことができるようになった。それゆえ、小学校ごとにカリキュラムが違っているの、いろいろな小学校から進学してくる中学校では、今以上に運動経験、学習経験等に差がある生徒が集まるといった現状になるに違いない。しかし、小・中学校の系統性を考え、それぞれの段階で身につけさせたい技能や学習の仕方など指導内容を明確にし、それぞれの学校の教員がそれらを共通理解したならば、児童生徒への指導が一貫したものになると思われる。昨年度は、小中それぞれ異なった校種の授業も参観して、実態を知ることが第一の目標としたが、小学校として「やっておくべきこと」が見えてきたり、中学校として「できそうなこと」が検討されたりしてきた。今年度は、まず昨年度の小学校でのティーボールの公開授業を受け、中学校でのソフトボールの授業研究を進め公開する。ベースボール型は中学校でも平成24年度から加わる領域となる為、小学校からの系統性を踏まえた授業展開を中心に実践研究を推進する。その後、系統性と内容の明確化のまとめとし、小学校でのゴール型の授業を参観し、まとめとする予定である。

(文責 岩瀬)

昨年度のまとめと今後の取り組み

新指導要領において小学校におけるボール運



児童生徒の心が動く道徳の時間を目指して

プロジェクト研修員(道徳)

1 はじめに

昨年度(研究1年目)は「一人ひとりの心に響き、道徳的実践力の育成を目指す授業の工夫」というテーマで、授業研究を中心に研究を進めました。

小学校・中学校、それぞれの児童生徒の実態や課題は異なりますが、小・中学校間で道徳に関する情報交換をしたり、一緒に授業研究の準備をしたりすることを通して、発達段階の違いによる授業展開や資料の扱い方など、多くのことを学ぶことができました。

2 研究内容

授業研究に向けて、①取り上げる価値について、②資料について、③授業の展開について話し合いました。そして、授業研究を通して課題を明らかにしていきました。

負けない心～星野富弘～(困難を乗り越えて)

【不とう不屈 努力】

対象学年：小学校3年生

(1) 児童の心に響く資料の活用について

授業研究では、星野富弘さんの生き方を描いた「負けない心～星野富弘～」という資料を使用しました。マット運動中の事故のために、首から下が麻痺してしまった星野さん。絶望的な気持ちになりながらも、「もう一度、字を書きたい」という目標に向かって努力を続ける話です。首から上しか動かせない星野さんが、口に筆をくわえて字や絵を描く姿は、見る人に感動を与えます。

子どもたちは「星野さんの生き方はすごい!」と感じながらも、「自分たちも目標に向かって努力を続け、困難を乗り越えていこう」という思いを持つところまで至りませんでし

た。資料と児童の生き方とを結びつけ、児童が自身の生き方を振り返ることができるような指導の工夫が必要だと感じました。

(2) 授業展開の工夫について

資料の内容を理解しやすくするために、視聴覚機器を活用しました。怪我をする前と後の写真をテレビで見せたり、口に筆をくわえてゆっくり絵を描く様子をビデオで見せたりしました。

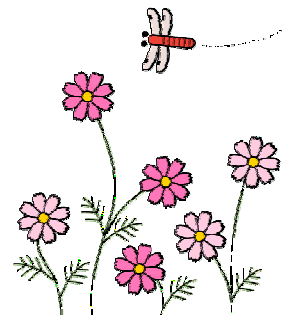
また、口に筆をくわえて字を書くことの大変さを味わわせたいと思い、授業の中で実際にペンをくわえて字を書く体験を取り入れました。

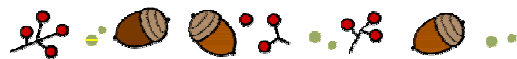
「上手に書けない」「ふるえちゃう」など、星野さんの苦勞を体感することができました。実際に体験したことが、星野さんの努力がどれだけすごいものであったかを理解するための手立てになったと思います。

3 おわりに

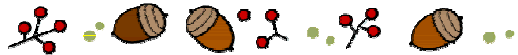
今年度は、中学校で授業研究を行います。3月11日に発生した、東日本大震災。この未曾有の大震災を取り上げ、中学生である自分たちに何ができるのかを考えさせる授業を計画しています。

昨年度の成果と課題を生かし、今年度も「児童生徒の心が動く道徳の時間」をめざして研究を進めて参ります。





「夢中になって運動に取り組む体育学習」



教育指導課指導主事

この夏、なでしこジャパンの快挙と室伏選手の世界陸上金メダルによって、日本のスポーツ界は明るい話題に包まれました。男女問わず、世界で活躍する選手を目の当たりにした子どもたちは、少なからず影響を受け、夢と希望を持ったことでしょう。

子どもたちにとっての体育学習は、いつの時代においても好きな教科の1つに挙げられます。それは、座学からの解放という魅力ではなく、それぞれの運動が持つ特性に触れることにより、競争したり踊ったりする楽しさを十分に感じているからであると考えます。

さて、6月に、ある小学校の5年生の体育「バスケットボール」の学習を参観する機会がありました。単元に入って2時間目の学習の様子です。各々にシュート練習をしている様子を見ると、バスケットボールを使わずに、大きめのドッジボールを使っていました。前時のゲームで、ゴールの近くまでせっかくボールを運ぶことができて、シュートしたボールがリングまで届かない状況があり、子どもたちは十分に楽しむことができなかったとのことです。5年生になったばかりの子どもたちにとって、バスケットボールは重くて扱い難いという実態があり、その問題について、話し合った結果、ボールを扱い易い大きめのドッジボールを使用することにしたということでした。ゲームの様子を見てみると、確かに、シュートしたボールがゴールに向かって飛ぶようになり、両チームの攻防に盛り上がりが見られました。その後の子どもたちの意見からも、シュートが入るようになって、前時より得点が増えたことが挙げられ、十分にゲームを楽しむことができたようでした。子どもたちが、今持っている力でゲームを楽しむ為には、用具やルールを自分たちに合ったものに工夫することを改めて認識できた一場面でした。

2週間後、この学級の8時間目の学習を再度参観しました。体育館に入ってきた子どもたちの表情は、以前にも増して、生き生きしています。すぐに用具を出したり、学習カードを配ったりしながら、手際よく準備をし、練習を始めました。先

生の指示がなくても、何をどのように準備すればよいかということを意識し、役割分担しながら準備を進めていること、各々がシュート練習するのではなく、チームでボールを1個にして、作戦に沿った練習をしている様子などが見られました。単元が進むにつれて、自主的に学習を進めようとする姿勢と、チーム力を高めていこうとする学びが、そこに表れていると感じました。ゲームの様子には、明らかに子どもたちの動きがよくなり、ポジションやパス、シュートの中で、作戦を意識したプレーが見られるようになりました。勝敗にこだわり、勝って喜ぶ姿、負けて悔しがる姿が見られました。負けても、もっとやりたいという更なる欲求につながっている様子に、思い切り体を動かして、多くの仲間と楽しもうとする本来の子ども姿を見た気がしました。

2度の参観を通して、担任の先生の指導観の素晴らしさを感じています。1つは、常に子どもたちの実態に寄り添い、子どもたちが今持っている力を的確に把握していることです。日頃からの子どものみとりを大切にされていることがよく伝わってきました。もう1つは、学習の主体者は子どもであるということ、教師自身だけでなく、子どもたちにも意識させているところです。できるだけ余分な指示は避け、自発的に学習を進められるようにしています。また、問題となることは、自分たちで考えさせようとしていました。

昨今、子どもの体力・運動能力の低下や運動する子としない子の二極化等、子どもの健康・体力に関する課題が挙げられています。しかしながら、体力を向上させるためだけの体育学習ではなく、この学級のように、子どもたちが運動の特性にふれ、夢中になって運動に取り組み、その楽しさを味わうことができれば、それが生涯スポーツへの礎となり、生涯にわたって、スポーツライフを取り入れていこうとする資質につながるものと考えています。

つながろう、学校と地域！ つなげよう、未来に！

～平成23年度教育講演会～

8月25日（木）、小田原市、足柄下郡の幼稚園、小・中学校の教職員のみなさんを対象に、教育講演会を開催しました。今年度は、前杉並区立和田中学校長・東京学芸大学客員教授の藤原和博先生をお迎えし、「つなげよう！学校と地域社会～子どもたちの未来を拓くために～」という演題で、約2時間のご講演をいただきました。藤原先生のエネルギッシュな講演から「なるほど！納得!!」と思ったことの一部をまとめてみました。

これからの教育を考える上では、社会の変化をとらえることがまず、大切である。少子高齢化よりも何よりも20世紀までの成長社会から成熟社会へと変わったことが大きい。

成熟社会に生まれ、育つ子どもたちにとっては、それぞれ一人ひとりの幸福感を見つけなくてはならない、タフな社会であることを認識しなくてはならない。子どもの抱える「孤独感」「（これからの将来への）恐ろしさ」。そうした不安や孤独からいろいろな物事に「さめている」子どもたちがいるのだ。

これからの成熟社会では、常識や使われている言葉を全て疑うことが必要。上手に疑うこと。クリティカル・シンキング（＝複眼的思考）が求められる。クリティカル＝本質

制限を加えることで「情報編集力」へのスイッチが入る。今の保護者の中には、子どもを自由にすることで子どもにクリエイティブな力が付くと思っている人がいるが、それは間違い。足りないから何かで補おうとする。だから工夫する。今、被災地の子どもたちの学習は遅れている。しかし、ものが無い状況の中で、様々な工夫をして生活をしている。そこでは「情報編集力」が育っているとされる。これから実証されていくだろう。



教員が本来の業務に専念できるようにするための「地域本部」である。学校の教職員が全てのニーズに応えるのは無理。それを支える地域づくりが必要なのである。

子どもたちへの問いかけ方で、まずいのは「わかる人？」と聞くこと。「正解主義」の呪縛から逃れられない日本の教育現場の現実がある。日本の教育問題の1つには、「正解がはっきりわからないものに対して、消極的であることが挙げられる。また、日本人の特徴として、初めに絶対的な正解を提示しなくてはならないという考え方が染み付いている。

講演会から1ヶ月・・・

講演会の中で、「なぜ葬式では黒い服を着るのか？」という藤原先生からの質問があり、その答えが気になって、「はじめて哲学する本」(ディスカバー 21 社刊)を読みました。(その答えをここで紹介することはしませんが、研究所に本書がありますので、お声をかけてください。)

『・・・ほんとうは、子どもたちは、「教える大人の姿」からではなく「学んでいる大人の姿」から多くを学ぶことを知ってほしいと思う。・・・「子どもにとって最高の教材は、学んでいる大人の姿なんだ」と、ボクはいつも先生や保護者たちに訴えている。(第22章呼称について)』という文章がありました。私達は子どもたちの「考える力」を育てたいと日々取り組んでいます。それには、まず、大人自身が一生懸命考えたり勉強したりする姿を見せること、そして子どもたちと一緒に、正解なき問いに向かっていくことが必要なのだと、改めて思いました。教師は、先の見えない今の社会を生きる子どもたちにとって、モデルとなるべき存在なのだと。



「小田原の自然」活用講座

研究所刊行物の一つ、「小田原の自然」を活用し、身近な自然を観察する講座で、年間8回実施しています。

うっかりすると見過ごしてしまう小さな虫や植物に目を向け、大人も子どもも一緒になって驚いたり（！）、疑問に思ったことを伝え合ったり（？）する経験の共有は、子どもたちに向けて、郷土の自然の豊かさを伝えるだけでなく、学び続ける姿勢そのものを伝えることにもなるのではないかと、とも思えます。

これからの自然観察会

「小田原の地形」～地質・地形を調べよう～

11月5日（土）JR下曾我駅集合

初めてみた石や植物などがたくさんありました。前からほしかったセラドン石（セドナイト）や、見ると幸せになれるきちょうそうの実、いろいろな物が見られました。とくにびっくりしたことはクモに目が8こあることです。とっても楽しく参加できました。また参加したいです。

（H22に参加した小学4年生の感想より）

「酒匂川の野鳥」～冬の鳥を見よう～

1月21日（土）小田急線蛸田駅集合

今回は様々な野鳥を見られて良かった。今回は珍しいミサゴやハヤブサなどが見られて、前回の観察よりも楽しかった。1年たつと地形や家の場所も変わり、鳥の種類、生息場所が変わってしまうんだなと思い、おどろいた。「冬の野鳥を見よう」で今年は最後なので楽しんで良かったです。

（H22に参加した中学2年生の感想より）



プロジェクト研修公開授業

「百聞は一見に如かず」、研修員の皆さんの、新しい授業づくりへの提案をぜひご覧ください。

教科・公開日・テーマ	会場校・学年
国語科部会（11月2日） [思考を深めて表現力につなぐための学習活動の工夫] （注）学習指導法研修会を兼ねる為、一般公開はなし	酒匂小・6年
社会科部会（1月20日） [学習意欲を喚起する学習活動のあり方と小中の連携] ～社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～	久野小・5年
算数・数学科部会（12月16日） [活用する力を育てる算数・数学指導の工夫]～数学的表現力を育む～	城北中・1年
理科部会（12月2日） [理科好きな子を育てる学習の工夫]～小中の理科学習を通して～	桜井小・6年
保健体育部会（10月20日） [小中学校の系統性を考えた体育学習] ボール運動・球技の領域を中心にして	千代中・2年
外国語活動・外国語部会（1月16日） [小・中のつながりを意識したコミュニケーション能力の育成をめざして]	白鷗中・2年
道徳部会（11月17日） [一人ひとりの心に響き、道徳的実践力の育成を目指す授業の工夫]	白山中・2年

※社会科部会は、早稲田大学教授 小林宏巳先生の指導講評があります。

※算数・数学科部会は、横浜国立大学教授 石田淳一先生の指導講評があります。

小田原教育 第115号

発行日 平成23年10月7日（金）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 佐久間 秀樹

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730